群教セ	G08 - 03
	令3.278集
	商業

商業科目「簿記」における協働的な学習によって思考・表現し、新たな発見や気付きができる生徒の育成
――ICT端末を活用した学習と自らの学習の振り返りを通して――

特別研修員　小林　大和

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

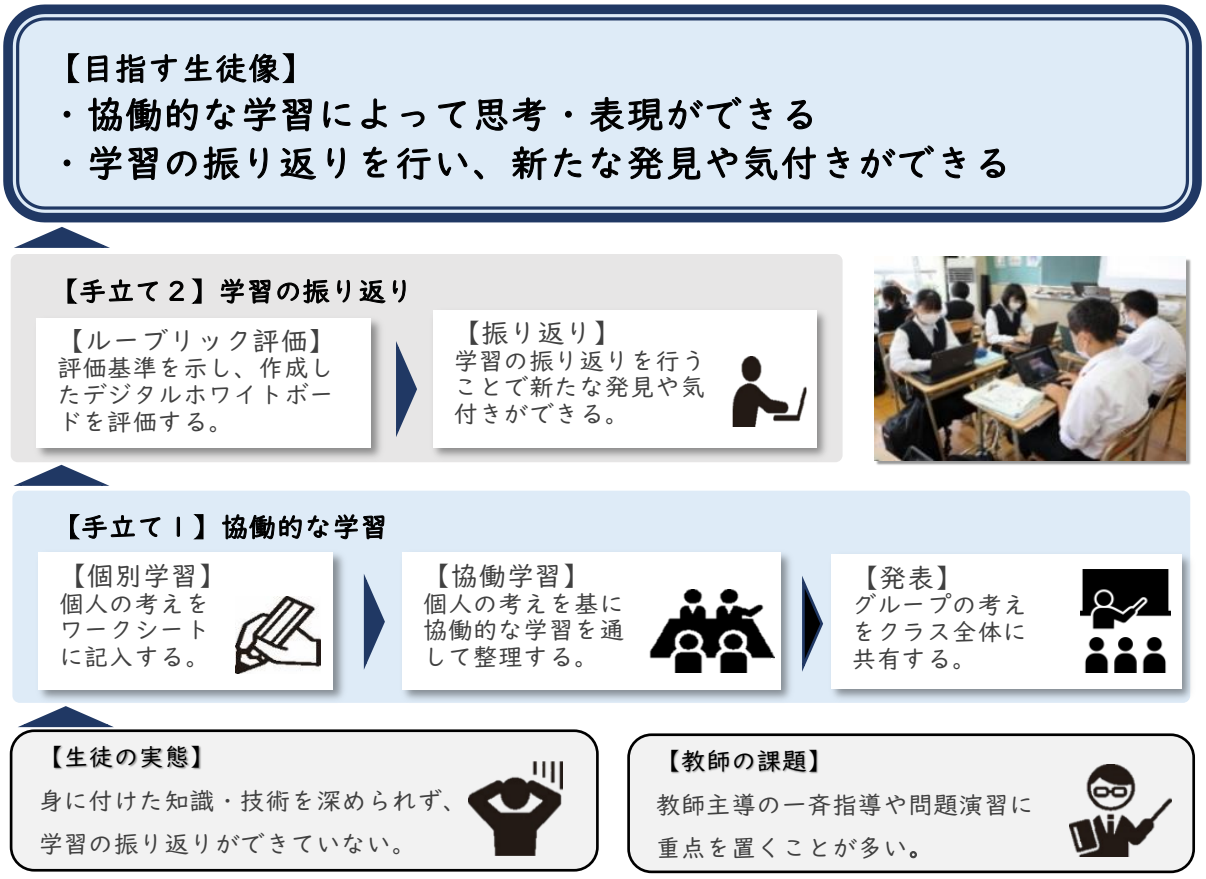
県立学校教育指導の重点（商業の目標）には「ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人を育成するために、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、職業人として必要な知識や技術を習得させるとともに、職業人に求められる倫理観や豊かな人間性を育み、ビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う」とある。

研究協力校（以下、協力校）のグランドデザインには、「①主体的な行動力、②思いを伝える表現力、③発想を形にできる企画力、④協力して取り組むことができる協調性や対人関係能力（人間関係修復力）」の四つの目標が挙げられている。協力校の生徒は、ビジネスの諸活動に必要な各種の資格取得に対して、目標をもち、意欲的に取り組み成果を上げている。しかし、教師主導の一斉指導や問題演習に重点を置くことが中心となってしまう傾向がある。そのため学習を通して理解を深めることや生徒が新たな発見及び気付くことができていない。

そこで、基礎的・基本的な知識・技能を活用した協働的な学習をする上で、効果的にICT機器を活用して理解を深め、学習を振り返ることで新たな発見や気付きができる生徒を育成したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

既習事項から身に付けた知識・技能を活用して協働的な学習をする上で、効果的にICT端末やICT機器を活用して理解を深め、学習の振り返りを通して新たな発見や気付きができる生徒を育成するために、次の二つを手立てとして考えた。

手立て１　ICT端末を活用した協働的な学習

既習事項から個人としての考えをワークシートに記入し、協働的な学習に活用する。

個人の考えを協働的な学習を通して整理する。（デジタルホワイトボード）

発表を行い、グループの考えをクラス全体に共有するとともに生徒同士が相互に評価し、新たな発見や気付きの場とする。（インタラクティブプレゼンテーションソフト）

手立て２　学習の振り返り

ルーブリック評価による評価基準を示し、発表したグループに対する評価を教師が行った後に、各自がグループで作成したデジタルホワイトボードを自己評価する。

協働的な学習を通して深めた知識や思考を振り返ることで新たな発見や気付きを把握する。（アンケート作成ソフト）

これまで行ってきた一斉指導や問題演習に重点を置いた授業展開では、小テストや補習などを行うことで理解度の把握や個別の対応を行ってきたが、その指導の難しさを感じていた。生徒が主体的に学習に取り組んでいくためには、生徒同士が協働的な学習を通して理解を深めることや生徒自身が新たな発見や気付きくことができるような指導の工夫が必要である。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　手立て１については、デジタルホワイトボードを活用した学習に対するアンケートから、「グループで協力して取り組み、まとめることができた」「グループ活動によって他人の考えを知ることができた」など、個人の考えを基に協働して作成・編集を行うことで思考力・表現力を高めることができた。デジタルホワイトボードにまとめた内容を発表し、クラス全体に共有することで、新たな発見や気付きの場となり、さらに生徒の思考を深めることにつながった。発表に対する評価をインタラクティブプレゼンテーションソフトで発表者の評価を即時に可視化することで、よい点・改善点が分かり、評価者も発表を真剣に聞く態度が見られた。

○　手立て２については、協働的な学習で深めた理解を振り返ることで、学習内容の要約や発展的な学習にも意欲的に取り組み、新たな発見や気付きを把握することができた。

○　手立て１、手立て２を通して副次的な成果として以前までは、紙媒体でのワークシートの提出状況が89％であったのに対して、アンケート作成ソフトを活用した場合には100％となった。また、教師が示した評価基準（５ページ図５）に対しての自己評価を「上手くまとめられていたと思うが、二つの班がＡとＢの境目だと考えると自分たちの班はＢだと思った」というように客観的な評価をすることができ、自己調整力の向上に有効な手立てであることも分かった。

２　課題

○　協働的な学習の時間配分を20分と設定したが、途中で集中力が切れてしまう生徒もおり、詳細な時間設定として個別に入力する時間（３分）、グループ協議（12分）、発表準備（５分）などに分割して設定することで生徒の活動を明確にする必要がある。

○　発表に対する評価をインタラクティブプレゼンテーションソフトで入力させた内容には「声が大きい」「分かりやすい」が散見された。発表の質を向上させるためには、批判的思考を取り入れ、評価者の思考を高める手立てが必要である。

○　教師が示した評価基準に対して自己評価をする場合には、評価の理由だけにとどまらず、どのような工夫を加えればＡの評価となるかを思考させて記述することが必要である。

実践例

１　単元名

「第18章　販売費及び一般管理費と税金の取引」（第１学年・２学期）

２　本単元について

本単元では、販売費及び一般管理費と税金の取引について学習する。これまで基本的な仕訳や補助簿の作成、決算、財務諸表の作成といった簿記の一連の流れについて学習してきた。簿記の一連の流れを意識させた中で、販売費及び一般管理費、個人企業に課せられる税金、消費税について学習する。

販売費及び一般管理費では、販売費・一般管理費・営業外費用の区分、個人企業に課せられる税金には事業税・固定資産税・印紙税があり、租税公課勘定を用いることを理解する必要がある。また、消費税は生徒の生活にも密接に関わっているが、授業では企業側の視点で考えることや記帳方法には税抜方式・税込方式がある点に留意して指導する。その上で、協働的な学習を通して生徒同士が主体的に思考・判断・表現することで、理解を深めることができる。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

<table>
<tr><td>目標</td><td colspan="2">販売費及び一般管理費と税金の取引に関する仕訳や記帳方法の学習を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　販売費及び一般管理費と税金の取引に関する基本的な内容とその記帳法を理解して、基礎的・基本的な知識・技術を身に付けさせる。（知識及び技術）
イ　販売費及び一般管理費と税金の取引の記帳に関して、自らの思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し、表現する能力を身に付けさせる。（思考力、判断力、表現力等）
ウ　販売費及び一般管理費と税金の取引に関心を高め、その記帳処理の学習を積極的に進めさせる。（学びに向かう力、人間性等）</td></tr>
<tr><td>評価規準</td><td colspan="2">(1) 販売費及び一般管理費と税金の取引に関する基本的な内容とその記帳法を理解して、基礎的な知識・技術を身に付けることができる。（知識・技術）
(2) 販売費及び一般管理費と税金の取引の記帳に関して、自ら考えを深め、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し、表現することができる。（思考・判断・表現）
(3) 販売費及び一般管理費と税金の取引に関心を高め、その記帳処理の学習を積極的に取り組むことができる。（主体的に学習に取り組む態度）</td></tr>
<tr><td>過程</td><td>時間</td><td>主な学習活動</td></tr>
<tr><td>つかむ</td><td>第１時</td><td>○販売費及び一般管理費に関する取引
・販売費及び一般管理費に関する基本的な仕組みを理解する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">追究する</td><td>第２時</td><td>○個人企業の税金に関する取引
・個人企業に課せられる税金の事業税・固定資産税・印紙税に関する意味と仕組みを理解する。</td></tr>
<tr><td>第３
～４時</td><td>○消費税に関する取引
・消費税の税抜方式・税込方式に関する仕組みを理解する。
・消費税の意味や税抜方式・税込方式の相違点について学習した知識・技術を活用し、協働的な活動を通して考え、整理する。</td></tr>
<tr><td>まとめる</td><td>第５時</td><td>○演習問題
・これまでの習熟度に応じたグループ編成を行い、身に付けた既習事項を活用することで学習内容を定着させる。</td></tr>
</table>

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全５時間計画の第４時に当たる。消費税の取引については、前時までに消費税の意味と税抜方式・税込方式における仕訳を理解させ、基礎的・基本的な知識・技術を身に付けた。本時は既習事項を個別のワークシートに記入させることから始め、協働的な学習に繋げていった。グループは４名～５名で編成し、役割分担を１時間ごとに変更するようにしている。

本研究では、協働的な学習によって思考・表現し、新たな発見や気付きができる生徒の育成をねらいとしており、具体的には次の二つの手立てを設定した。

手立て１　ICT端末を活用した協働的な学習

既習事項から個人としての考えをワークシートに記入し、協働的な学習に活用する。

ワークシートに記入した考えを協働的な学習を通して整理する。（デジタルホワイトボード）

発表を行い、グループの考えをクラス全体に共有するとともに生徒同士が相互に評価し、新たな発見や気付きの場とする。（インタラクティブプレゼンテーションソフト）

手立て２　学習の振り返り

ルーブリック評価による評価基準を示し発表したグループに対する評価を教師が行い、各自がグループで作成したデジタルホワイトボードを自己評価する。

協働的な学習を通して深めた知識や思考を振り返ることで新たな発見や気付きを把握する。（アンケート作成ソフト）

４　授業の実際

本時の学習課題の設定は、消費税の意味や税抜方式・税込方式の相違点について学習した知識・技術を活用し、協働的な活動を通して考え、整理させることである。生徒は個別学習、協働学習、発表、振り返りの順で学習に取り組むこととした。

(1)　導入

導入では、本時の目標と前時に学習したワークシート（図１）の内容について振り返りを行い、個人としての考えを３分間で記入した。机間支援を行い生徒の様子を観察しながら指導を行った。個人の考えを基に協働的な学習に移行するよう指示した。

図１　ワークシート

(2)　展開

展開では、デジタルホワイトボード（図２）を活用した協働的な学習に取り組んだ。役割分担（司会・記録・発表・協議）を付箋で色分けして入力することを、確認した。次に個人でワークシートに記入した内容をフレームに入力し、グループごとの協働的な学習を通して意味や相違点などを整理するよう指示した。教師は支援者として、協働的な学習が円滑に進められるよう留意した。各グループで司会者の進行によって、どのように整理するか話合い、主体的に取り組む態度が見られた。「消費税の意味・税抜方式・税込方式の三つの視点からそれぞれのシートにまとめよう」「税抜方式と税込方式を比較するために同じシートにまとめよう」などの発言や、教科書や前時で行った問題演習を振り返るグループもあり、グループごとに創意工夫して取り組んでいた（５ページ図３）。協働学習においての進捗状況を観察し、状況に応じて指導・支援を行いその後、発表を行うグループを選定した。選定をする上で重視した点はクラス全体に指標となるようなものという観点から行った。発表につ

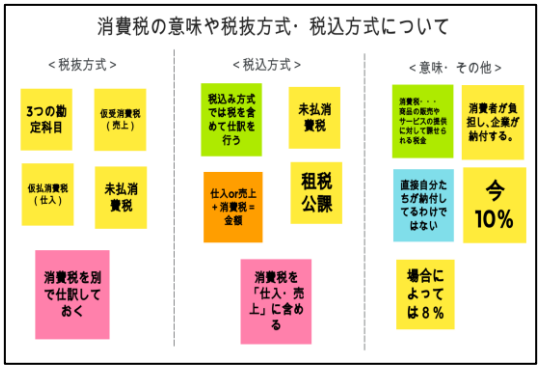


図２　デジタルホワイトボード

いては、三つのグループが行いクラス全体に指標となるような内容を共有することができた（図４）。発表者の評価は、インタラクティブプレゼンテーションソフトを活用して行うことで発表者が即時に評価点やコメントによるよい点・改善点が分かり、評価者も発表を真剣に聞く態度が見られた。三つのグループの発表後にルーブリック評価（図５）による評価基準を示し、発表した三つのグループの評価を行った。評価基準のＡにおける「創意工夫がなされている」という点については、あえて工夫の形を特定せず自由に工夫している点を評価するためであることを強調した。

図３　協働的な学習の様子

図４　発表の様子

	A	B	C
思考・判断・表現 (デジタルホワイトボード)	消費税の意味や税抜方式・税込方式の相違点をまとめることができ、創意工夫がなされている。	消費税の意味や税抜方式・税込方式の相違点をまとめることができている。	消費税の意味や税抜方式・税込方式の相違点が分けられていない。

図５　ルーブリック評価の基準

(3)　まとめ

アンケート作成ソフトを活用して本時の振り返り（図６）を行った。アンケート結果より協働的な学習や発表、自己評価によって理解を深め、新たな発見や気付きがあったと感じる生徒が多かった。

１　デジタルホワイトボードについて
　（１）自己評価　　（２）評価の理由
２　グループ学習について
　（１）役割分担　　（２）役割に対する取り組み
３　考えてみよう
　（１）消費税についてまとめる（80～100 字）
　（２）税抜方式・税込方式のメリット・デメリット

図６　アンケート項目

５　考察

本研究では、今年度より本格的に実施された ICT 端末を活用し、協働的な学習と学習の振り返りに取り組んだ。その理由として、教師主導の一斉指導や問題演習に重点を置く傾向がある簿記の授業では、協働的な学習を通して理解を深めることや生徒が新たな発見や気付くことができていないと感じたからである。生徒が主体となって学習に取り組むためには、既習事項を基に学習を深められるような授業づくりが必要である。

本研究における「手立て１　ICT 端末を活用した協働的な学習」では、生徒が主体的に取り組む態度が見られ、生徒同士が思考・表現することで学習の理解を深めることができた。デジタルホワイトボードを活用することで、生徒一人一人が自分のペースを大事にしながら協働で作成・編集などを行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動となった。また、クラス全体に共有する場面を設けることで新たな発見や気付きへとつながった。このことにより、教師の一斉指導の場面が減り、生徒の意見や考えから授業を深めていく機会にもなった。さらに、問題演習や発展的な学習への取組みにも変化が見られ、あきらめてしまうのではなく、生徒間同士で互いに答えの根拠を思考し、解決しようとする姿が見られるようになった。他の教科においても協働的な学習の場面で同じような姿が見られるようになった。「手立て２　学習の振り返り」では、協働的な学習で深めた内容を個人として振り返ることで、学習内容の理解を深め、新たな発見や気付きを把握することができた。また副次的な成果として課題提出率や自己調整力を向上させることができた。

協働的な学習や、学習の振り返りを継続していくことで、生徒が主体的に学習に取り組むことが分かった。今後も継続してこの手立てを取り入れた授業づくりをしていきたい。また、ICT端末やICT機器の活用について、より効果的な活用方法を考えていきたい。